

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730769

研究課題名(和文) 聞こえない者のアイデンティティ発達と家族関係におけるアセスメントの研究

研究課題名(英文) Assessment of identity development for Deaf and Hard-of-hearing and family relations

研究代表者

富田 更紗(甲斐更紗)(KAI, Sarasa)

九州大学・基幹教育院・研究員

研究者番号：40589636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：聞こえない者のアイデンティティ発達と家族関係における心理臨床的支援のアセスメントツールの開発を目的に、聞こえない子・者をもつ聞こえる母親への質問紙調査、聞こえない子・家族の集団活動の参与観察、聞こえない子、家族への支援者・支援機関への視察・聞き取り調査、海外における実践把握調査を行った。結果として、聞こえる家族がもつ心理臨床的支援のニーズの内容が明らかになった。調査で得られた結果をもとに、臨床の現場で活用できるアセスメントの指標を検討することが課題である。

研究成果の概要(英文)：In this study we investigated the Assessment of identity development for Deaf and Hard-of-hearing and family relations. The research methods included a interview and a questionnaire, fieldwork to Hearing family with deaf and Hard-of-hearing children, the supporters for deaf and hard-of-hearing children. As a results, investigation revealed that the needs of psychological support for Hearing family (mothers). Founded on a result by investigation, we have to examine an index of the assessment of identity development for Deaf and Hard-of-hearing and family relations.

研究分野：特別支援教育

キーワード：アイデンティティ 聞こえない子・者をもつ母親 家族関係 アイデンティティ アセスメント

### 1. 研究開始当初の背景

聞こえない、聞こえにくい子・者(以下、「聞こえない者」とする)が聞こえないという障害により音声言語を通して日本語や知識などを学ぶことは困難であった。したがって、明治時代からそれを解決することが聴覚障害教育の課題であり、様々な教育方法がされてきた。

しかし、従来の聴覚障害教育は、聞こえない者が相互に分かり合える「手話」は言語ではないという誤解があり、百数年にわたり手話活用が禁止され、聞こえないことを否定し聞こえる人になることを目指す口話法が中心であった。それが結果的に、聞こえない者のアイデンティティ発達の問題(聞こえないことによるネガティブな自己の肥大、対人関係形成の困難など)が生じ、聞こえる家族との間に様々な齟齬を生み出してきた(山口, 2001; 甲斐・鳥越, 2006, 2007; 河崎, 1999, 2000, 2003, 2004<sup>a</sup>, 2004<sup>b</sup>etc.)

人は家族、学校、友達など、さまざまな集団に身を置くことによって、言語やルール、文化を共有し、それらを自分の中に取り入れながら、アイデンティティを形成していくが、こうした経験は「ことば」によって紡いでいく。しかし、聞こえる親をもつ聞こえない者においては、聞こえないということによって、家族との関わりの中で「語る」といった体験が乳幼児から現在までの間で形成されないことが考えられた(甲斐・鳥越, 2008)。我が子が聞こえないと告げられた聞こえる親の多くは驚き、落胆し、混乱するが、聞こえない子や家族への早期支援の場である教育現場では、家族関係を培うための十分な支援(心理臨床的支援も含める)を受けることなく、口話訓練の場に引っ張り出された。親は聞こえない者が「聞こえる人である」ことにアイデンティティを求めてきたが、それは自己否定にしかつながらなく(Leigh・Stinson, 1991 etc.) 彼らの家族関係が蝕まれることが多かった(河崎, 1999, 2003, 2004<sup>a</sup>, 2004<sup>b</sup> etc.)。その結果、家族関係の様相が、聞こえない者として生きる子のアイデンティティ発達の問題と大きく関わる。また、河崎(2003, etc)は早期支援における心理的サポートの必要性を説いている。

そのため、聞こえない者が健全なアイデンティティを発達させるには、教育現場において、聞こえない者のアイデンティティ発達と家族関係に焦点をおいた心理臨床的支援が重要なポイントとして挙げられる。そこで、支援を開始するにあたって、聞こえない者のアイデンティティ発達と聴者の家族関係をアセスメントすることが不可欠であるが、そのアセスメント方法はまだ確立されていない。その背景として、「音声言語」をもたない聞こえない者への心理臨床的支援は、欧米では先駆的に取り組まれているが、古賀ら(1994)によると、我が国では「音声言語」

を駆使する接近法を中心とする心理臨床の対象から除外されていた経緯があった。近年になって、聞こえない者や家族への心理臨床的支援が少しずつ始まった。心理臨床的支援においては、心理療法と心理的支援を行うためのアセスメント、この二つがうまくかみ合うと、バランスのとれた心理臨床的支援が行える。しかし心理臨床において心理療法の期待が高まってきているのに対して、アセスメントの分野ではまだそのような広がりを見せていない(栗村, 2006)。聞こえない者の言語を考えると、手話という視覚言語が重要であるが、長い間、手話は言語ではないという誤解のもとに聴覚障害教育の現場で否定されてきたため、アセスメントにおいて、手話の言語性や聞こえない者や聞こえる家族の特性を考慮した方法はほとんど皆無である(滝沢ら, 2004)。

### 2. 研究の目的

聞こえない者のアイデンティティ発達と家族関係の様相を詳細に明らかにし、教育現場で、聞こえない者のアイデンティティ発達と家族関係に焦点をおいた心理臨床的支援が実施できるためのアセスメントツールを検討することを本研究の目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、聞こえない者のアイデンティティ発達と家族関係の様相を詳細に明らかにし、教育現場で、聞こえない者のアイデンティティ発達と家族関係に焦点をおいた心理臨床的支援が実施できるためのアセスメントツールを検討するために、以下の方法で調査を実施する。

#### (1) 聞こえない者をもつ母親への調査:

平成 24 年 5 月から 7 月、A 地域の難聴児をもつ親の会に所属している、聴覚障害児・者をもつ母親への質問紙調査  
調査対象者の属性・状況: 家族構成、子どもの身体障害者手帳等級、聴力、障害種、子どもの教育歴などについての 11 項目。  
実行されたサポート尺度(以下、ISSB 尺度): Barrera・Sandler・Ramsay(1981)の The Inventory of Socially Supportive Behaviors の情緒的サポート項目を翻訳・一部修正した 11 項目(北川・七木田・今塩屋, 1995)。子どものライフステージにおける母親の気持ち及びサポート(支援)の内容、心理臨床的支援についての考え(自由記述)。

B 地域の聴覚障害者支援施設での聴覚障害児と聞こえる家族との集団活動の参与観察

(2) 聞こえない子、家族への支援者・支援機関への調査: 平成 26 年 7 月において、公立ろう学校 1 校訪問調査・母子やりとりのフィールドワーク・支援関係者へのインタビュー調査を実施。

(3) 海外の先駆的取り組みの調査: 平成 25 年 1 月 30 日から 2 月 2 日に香港での取り組

みについて情報収集・聞き取り調査を実施。  
 平成 25 年 6 月に Hawaii School for Deaf and Blind の視察および聞き取り調査を実施。  
 平成 25 年 7 月に、ポルトガルの 6th International Deaf Academics and Researchers Conference にて、ヨーロッパにおける実情の聞き取り調査を実施。  
 平成 26 年 9 月 14 日から 20 日にかけて、UK のマンチェスターとベルファストにおいて、情報収集・聞き取り・視察調査を実施。

#### 4. 研究成果

##### (1) 聞こえない者をもつ母親への調査

質問紙調査対象者の属性・状況：身体障害者手帳 1 級をもつ聴覚障害児・者の母親は 11.1%、2 級をもつ聴覚障害児・者の母親は 55.6%、3 級をもつ聴覚障害児・者の母親は 27.8%、6 級をもつ聴覚障害児・者の母親は 5.5%であった。ほとんどの子どもは感音性難聴であった。インテグレーション教育を受けた聴覚障害児・者をもつ母親は 83.3%であった。聴覚障害児・者と母親とのコミュニケーションについて、手話と口話を用いる母親は 33.3%、口話のみの母親は 50%であった。カウンセリングなどの心理臨床的支援を受けたことがない母親は 94.1%であった。

ISSB 尺度：親がこれまでに受けた情緒的サポートに対する気持ちを、聴力が 90dB 以上である子どもの母親と、90dB 以下の子どもの母親に分けた。

高サポートの内容：それぞれの情緒的サポートについて「とても助けになる」「まあまあ助けになる」という回答がもっとも多かった項目図表 1 の通りである。

図表 1 高サポートについて

高サポートの項目	全体 (N=18)	90dB 以上の子どもをもつ母親 (N=12)	90dB 以下の子どもをもつ母親 (N=6)
私を元気づけてくれた	77.8%	75.0%	83.3%
私と同じような境遇にあったときの話をしてくれた	77.8%	75.0%	83.3%
私の個人的な話を聞いてくれた	77.8%	75.0%	83.3%

低サポートの内容：それぞれの情緒的サポートについて「全く助けにならない」「助けにならない」「なし」という回答がもっとも多かった項目は図表 2 の通りである。

図表 2 低サポートについて

低サポートの項目	全体 (N=18)	90dB 以上の子どもをもつ母親 (N=12)	90dB 以下の子どもをもつ母親 (N=6)
あまり無理をしないでがんばって、と言ってくれた	22.20%	8.30%	50.00%
私の立場やつらさがよくわかる、と言ってくれた	16.70%	8.30%	33.30%
私にとっても親しみを感じると言ってくれた	11.10%	—	33.30%
私がどうすればいいかを教えてくれた	8.30%	8.30%	—

子どものライフステージにおける母親の気持ち及びサポート（支援）の内容、心理臨床的支援について：母親の回答の一部を図表 3,4,5,6,7 に示した。

図表 3 聞こえないと分かったときのサポート（支援）の内容

カテゴリー	内容
医療 / 保健サポート	・聴力検査を受けた。 ・保健師からの支援（情報提供）
教育サポート	・早期教育機関の紹介 (N=6) ・専門機関の先生に「大丈夫ですよ」と言われて安心した。
ピアサポート	・親の会とのつながり
家族サポート	・自分の親とのつながり ・無回答 (N=1)

図表 4 子どもを育てる中で一番辛かった出来事

カテゴリー	内容
メンタルヘルスの問題	・聞こえる子どもたちの無理解による我が子の孤立などで、親がうつ病を発症。 ・聞こえない子が聞こえる人の世界でストレスを受け、心の病気になった。
家族の無理解	・配偶者側の親戚・家族にひどい言葉を言われた (N=2)。
聞こえない子の交流関係	・聞こえない子が周りと交流出来ず、仲間はずれになった。 ・聞こえない子が地域の学校で友達が出来なかった。 ・聞こえない子が聞こえる子に障害をからかわれていても聞こえない

	子ども本人は気づかずにいた。
我が子の障害の受けとめ方	・聞こえない子から「生まれて来なければよかったのね」と言われた。
障害の発見	・聞こえないだけなのに知的な面にも障害があると誤解された。 ・難聴の発見が遅れたこと。 ・難聴以外の障害があるとされた。
進路	・親の希望とは違う学校(ろう学校)を子どもが選択した。 ・希望する学校(難聴学級)に入れてもらえなかった。

図表5 図表4のときが起きたときのサポート(支援)の内容

カテゴリー	内容
友人との関わり	・友達にあって気持ちを落ち着かせていた。 ・グチれる友達がいた。
具体的な関わり方	・やさしいねぎらいのことばをかけてもらった。
家族からのサポート	・配偶者が聞こえない子の存在を肯定的にとらえてくれた。 ・家族に愚痴をこぼした。
教育現場からのサポート	・難聴学級の教師の指導(障害理解)があった。 ・ろう学校の教師に相談したり、話を聞いてもらったりした。 ・地域の学校の先生が相談にのってくれた。
ピアによるサポート	・同じ子をもつ母親に相談した。 ・(難聴児をもつ)親の会との関わり。
・サポート(支援)がなかった、受けられなかった(N=1)	

図表6 聴覚障害児をもつ母親へのサポートのニーズ

カテゴリー	内容
セルフヘルプグループ	・同じ仲間が必要。親の会の気の合う仲間とおしゃべり。 ・専門家との関わりも必要だが、親の会の存在が必要。
教育現場の先生によるサポート	・聴覚障害教育に理解のある先生による、親の不安の受けとめ姿勢 連携。
具体的な話し方	・丁寧なことば掛け

図表7 母親がもつ心理臨床的支援についてのイメージ・考え

カテゴリー	内容
傾聴的/アドバイスの関わり	・立ち直りのヒント・気づきを教えてもらえる。 ・話を聞いてもらう。 ・悩んでいる時にアドバイスや情報をくれる。 ・ネガティブな気持ちのときに心の支えになる。
ピア的関わり	・支援団体より近くにいる友人達との関わり
解決の難しさ	・全てを話せる性格ならうまくサポートされると思うが、(うまく話せない人には)少々難しいと思う。 ・一時的なもの、完全解決は難しいと思う。
アクセスに関する問題	・具体的な相談場所が分からない。 ・難聴に対する理解者が心理カウンセラーにいるかどうか疑問。
・無回答(N=10)	

B 地域の聴覚障害者支援施設での聴覚障害児と聞こえる家族との集団活動の参与観察：親子関係や家族についての感情に関するエピソードを抽出した。

(2) 聞こえない子、家族への支援者・支援機関への調査：平成26年7月において、公立ろう学校1校訪問調査・母子やりとりのフィールドワーク・支援関係者へのインタビュー調査を実施した。その結果、以下の、が明らかになった。

調査校における発達心理検査実施状況について、幼稚部では津守式乳幼児精神発達診断検査を活用、個別検査は必要に応じて実施、教示方法は対象児の実態に応じてキューサインや文字を活用。小学部では言語面の検査の活用が多く、中学部では重複障害生徒の指導内容・方法の選定のために、WISC-、K-ABCなどを活用。

居住地域で友達ができにくく、きょうだいがいない子は休み中一人で家の中で過ごすことが多く、家族関係にも影響があるということ。

(3) 海外の先駆的取り組みの調査

香港での取り組みについて：「コーエンロールメント」(聞こえる子どもの学校で一つの教室の中で、ほぼ同じ割合の聴覚障害児と聞こえる子が一緒に授業をうけること)という中で音声言語と手話言語似寄るバイリンガル教育(香港平安福音堂幼稚園など)の現状を把握した。

Hawaii school for Deaf and Blind：早期支援における母親支援の実態、読み書き教育における子どもたちの様相を把握した。

ヨーロッパにおける実情：ベルギーなどの各国において、人工内耳の子どもが増加しており、Deaf community は危機を感じている現状がある。ポルトガルは2つの Deaf 団体があり、1つの団体(Portuguese Deaf Association)は国際的つながりを持ちながら、政府と交渉を図っている。その団体は海外の情報を集めながら、人工内耳の問題に取り組むということである。ポルトガルでの家族支援においては、医療関係者が把握しているということで、Deaf community が把握している情報はあまり得られなかった。ポルトガルにおける手話言語をめぐる個人の個人と社会との関わりに関するエピソードを抽出した。

UK の実情把握：UK の各地域にある NDCS (The National Deaf Children, Young People and Family Services) が実施している Family-Friendly Hearing Services (FFHS) はどの地域でも実施されており、Deaf community と関わることを重視している。聞こえる親が、自分の子どもの聴力の理解をすることで、ろう、聴覚障害への理解を深めていくテストツールが開発されている。ペルファストにある Jordantown 学校では、ろう重複障害児(聴覚障害および、視覚障害がある聴覚障害児)を受け入れており、個別に合った言語力で指導を行っている。そこで、ろう重複障害児へのセラピーを積極的に行うことで、親子関係を形成させる。現在、(3)における、で収集したデータを分析中である。

また、(1)、(2)、(3)の調査で得られた結果をもとに、甲斐・鳥越(2006)のろうアイデンティティ発達の状況と比較し、家族関係とアイデンティティ発達との関連を検討することで、臨床の現場で活用できるアセスメントの指標を開発中である。

得られた成果を支援現場にフィードバックするために、聴覚障害児施設や、聴覚障害者授産施設職員などで構成された手話で語る心理臨床研究会や、聴覚障害/ろう(聾)者の言語・文化・教育研究会を運営し、2ヶ月に1回の例会を通して、情報発信をしている。

また、米国ペンシルバニア州認定臨床ソーシャルワーカーの池上真氏をお招きし、2015年2月20日に「セラピストとしての実践事例やソーシャルワーカーとの協働、日本と米国との違い」というテーマ、22日に「：「アメリカにおけるろう・難聴者に対するメンタルヘルスの歴史と現状」というテーマで専門的知識の提供をしていただいた。それらを通して、本研究の知見を深めるとともに、成果を社会に還元することができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

甲斐更紗、兵庫県の相談事業を通して、季刊みみ、査読無、第138号、2012、pp.22-24

甲斐更紗、高齢聴覚障害者の自分史構築と語り、立命館人間科学研究、査読有、第27号、2013、pp.61-74

小坂淳子・甲斐更紗・その他、きこえに障害のある子および保護者の不安や悩みに関する調査、阪神・淡路大震災から18年をむかえた兵庫県における聴覚障害者の実態と生活ニーズ調査報告書、2014、pp.168-208

甲斐更紗、高齢障害者の自分史、シノドス、査読無、第150号、2014、pp.63-90

甲斐更紗、日本における手話と聴覚障害教育、生存学、査読有、第8号、2015、pp.195-206

〔学会発表〕(計 7件)

甲斐更紗、社会・文化的モデルからみた聞こえない子をもつ聞こえる母親の「語り」、障害学会第9回大会、2012年10月27-28日、神戸大学(兵庫県神戸市)

甲斐更紗、集団回想法的実践から捉えた高齢聴覚障害者の語りの質的变化、日本発達心理学会第24回大会、2013年3月16日、明治学院大学(東京都港区)

甲斐更紗、聴覚障害児・者をもつ家族の心理臨床的支援ニーズについて-母親への質問紙調査の分析から-、日本特殊教育学会第51回大会、2013年9月1日、明星大学(東京都日野市)

甲斐更紗、発達検査の手話版開発に向けて、第13回手話研究セミナー、2014年2月1日、御堂会館(大阪府大阪市)

甲斐更紗、集団回想法的グループワークによる高齢聴覚障害者の語り、日本集団精神療法学会第31回大会、2014年3月23日、日本赤十字看護大学(東京都渋谷区)

甲斐更紗、高齢ろうあ者のナラティブ手話による語りとホームサインによる語りの比較から捉えた特徴-、第13回情報保障研究会、2014年7月19日、愛知県女性総合センターウィルあいち(愛知県名古屋)

Sarasa KAI "Psychological support needs of hearing mothers with Deaf and Hard-of-Hearing children in Japan" 6th World Congress on Mental Health and Deafness、2014年9月16-19日、ペルファスト(英国)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/deafpsychotherapy/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

甲斐 更紗 (KAI Sarasa)

九州大学・基幹教育院・学術研究員

研究者番号：40589636

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：